

なにもしなかった学生時代

生まれは尾道なのですが、父親が転勤族だったので、西日本各地を転々としてきました。高校は鹿児島で、父親の実家は熊本だったのですが、全然知らない土地に行きたくて、岡大に入りました。

学生時代はサークルもアルバイトもせず、のんびりと毎日を過ごしていました。自分でも「なにやっていたんだろう」と不思議に思うくらいです（笑）。ただ、映画だけはたくさん見ました。千日前商店街の映画館や、できたばかりの岡山メルパに通って、年間数十本は見ていたと思います。とくに『ピンク・パンサー』シリーズのブレイク・エドワーズ監督の映画や『ブルース・ブラザーズ』などハリウッド製のバカ・コメディが好きでした。私の作品にはユーモアがあると言われていますが、この時の影響があるのかもしれない。

デビューまでアルバイト生活

卒業後、東京のガラスビンメーカーに勤めましたが、入社当初から辞めたかったので（笑）、4年で退社。高校時代に推理小説をよく読んでいたので、光文社の『本格推理』という文庫シリーズの推理小説コンテストに作品を投稿してみたら採用されて、「これは作家としてやっていけるんじゃないか」と考えて、専業作家を目指しました。それが94年、26歳の時でした。8年間、アルバイトをしながら執筆を続け、2002年に光文社の新人発掘プロジェクトでデビューできました。

四六時中ネタ探し

私の小説はトリックを中心に据えた構成になっています。ストーリーを組み立てると

岡大異ベンチャーな人紹介

東川 篤哉 さん

作家

お嬢様刑事と毒舌執事がユーモアあふれる掛けあいで事件の真相に迫る推理小説『謎解きはディナーのあとで』（小学館）。60万部を超えるベストセラーとなり、各所で話題沸騰中の作者・東川篤哉さんに創作の秘密について語っていただきました。



▶東川 篤哉（ひがしがわ とくや）
1968（昭和43）年 広島県尾道市生まれ
1990（平成2）年 岡山大学法学部卒業
会社勤務を経て、2002（平成14）年、カッパノベルズ『密室の鍵貸します』で作家デビュー。著書に岡山を舞台にした『館島』（創元推理文庫）など。

『謎解きはディナーのあとで』小学館より発売中

きは、まずトリックから考え、それにぴったりのあしこしチュエーションをつくるようにしています。だから、四六時中トリックのことを考えているといっても良いです。トリックは新聞を読んだり、テレビを見たり、街を歩いたりしているときに、なにかの拍子で、なにかを見て考えつくことが多いですね。考えたアイデアはメモに残しています。今まではそのストックを使って創作してきましたが、『謎解きは〜』のヒットのおかげで仕事の依頼が増えているので、だんだん苦しくなってきました（笑）

その後、ストーリー構成をだいたい決めてから執筆にとりかかります。いったん書き始めるとスイスイいくのですが、書き出すまでが苦しいですね。作家としていちばん苦労するところですよ。書き終わったあと、本が書店の店頭で並んでいるのを見ると作家としての喜びを感じますね。とくに『謎解きは〜』は書店員さんからの反響もたくさんあって、うれしかったですね。

退屈させない作品づくり

作品を書く際には、とにかくわかりやすく、そして退屈させないことを心がけています。推理小説はどうしても途中で面倒な説明が多くなり、退屈になってしまうがちです。私の小説ではユーモアをいわばストーリーのエンジンとして取り入れ、読者を楽しませ、飽きさせないようにしています。『謎解きは〜』のヒットは、私の小説の世界観に主役二人の

キャラがびったりはまっているからだという評価を耳にします。それから、今回は女性読者向けに「おしやれ」という要素も取り入れてみました。うまくいっているかどうかはわかりませんが、それが女性読者に受けている理由かもしれません。

多くの読者に楽しんでもらえたら

2月に新刊『放課後はミステリーとともに』（実業之日本社）が出ました。『謎解きは〜』の続編も執筆中です。「ヒット作を出す」という作家になるときの目標は達成したのですが、これからもたくさん小説を世に出して、一人でも多くの方に楽しんでもらえれば、と願っています。